

中部の

エネルギーを 築いた

人々

“わが人生は闘争なり”の
松永安左工門 — その1 —

1898(明治31)年、松永安左工門は福沢諭吉の記念帳に“わが人生は闘争なり”と書き、24歳で慶応義塾を卒業した。

1964(昭和39)年1月、日本経済新聞「私の履歴書」の書きだしに、一生働けという松永の心構えを織り込み“生きているうち鬼と云われても 死んで仏となりて返さん”と歌った。

1971(昭和46)年に亡くなるまで現役で、電力に生涯を捧げ波乱の人生を送った松永安左工門を紹介する。



松永安左工門

慶応義塾から“わが人生は闘争なり”の実業界へ

1 生い立ち

松永安左工門は1875(明治8)年、杵岐島(現在：長崎県杵岐市石田町)に二代目松永安左工門の長男として生まれた。幼名を亀之助といい、生家は京阪神地方との交易、酒造業、呉服・雑貨、穀物の取り扱い、水産業(鰯網捕鯨網元)など多くの事業を営み、田地を所有する大事業家であった。祖父の初代安左工門は、裸一貫から一代でこれだけの事業と資産を築き上げた。

自伝には「祖父は、九州の一離島一杵岐の



松永安左工門夫妻の胸像(杵岐松永記念館)

商家の主人に終わったに過ぎないが、働き学ぶことを身をもって教えてくれた。松永家としては分家の身でありながら、幕末から明治にかけて、ほとんど徒手空拳、さして本家の援助も受けず、その時代なりの新しい事業をいろいろ起こした。今でも年に一度、祖父の命日の候には画像を飾って、壮年期の祖父に直面しているが、そのたびに反省させられるものがある。“人間は一生働き通すべきもの”という私の考えは祖父の生活態度から教えられている」と書かれている。

エピソード ①杵岐松永記念館の建設

松永が1957(昭和32)年、墓参のため帰郷した時、村長から松永記念館建設計画を相談された。松永は「大変ありがたいことだが、私は10年や20年は生きるかもしれない、否、ぜひ生きてやり残した仕事をせねばならないが、その間私も人間であるからどんな不名誉な失敗をやらぬとは限らない。もし、そのような事でもなったら記念館が泣くことになる。また仮に建てたとしても管理や経費で迷惑をかける。とにかく私は、皆様から記念館

念館を建てていただくような立派な仕事もしておられないし、そんな偉い男でもない。せっかくのご厚意であるが…」と固く辞退し建設には至らなかった。

その後、昭和44年、地元での有志や松永会の人たちが松永を訪ね、ようやく了解を得て建設に着手した。しかし、1971(昭和46)年7月24日の落成式を控えた6月16日に訃報を聞き、せめて生存中に完成し、一目でも見ていただきたかったと残念がった。

2 福沢諭吉先生の慶応義塾

1891(明治18)年、伊藤博文が首相となった時、父がこれからは学問次第で、だれでも天子様の次の位になれると話した。また、同じ九州の中津藩の微禄武士の出で、欧米で新しい学問を身につけ、斬新な学風で一世に知られた福沢諭吉の門下に入ることはその頃の青少年の憧れであり、松永は「学問のすすめ」を読んで感奮興起し、福沢門に進むことを独り決めしていた。そして、両親・親戚などの反対にハンガーストライキの手段をとり、しぶしぶ承諾を得て、1889(明治22)年、15歳で上京し慶応義塾に入学した。

1893(明治26)年、父が38歳で亡くなったので3代目安左工門を襲名し、壱岐で家業を継いだ。しかし、学校が途中で、このまま壱岐で終始することを恐れ、土地だけを継承し、家業を譲渡して慶応義塾に復学した。

慶応では、福沢先生の散歩のお供、芝居のお供などをして有意義な教育の場を持った。また、先生の次女・房さんの養子で、松永の人生行路に大きな方向付けをした福沢桃介と仲良くなったのもこの散歩のお供からであった。

3 わが人生は闘争時代の丸三商会から福松商会

福沢先生に学校生活がつまらなくなってきたと相談すると、「学校の卒業などということはいしたくない。それなら社会に出て働くがよからう。独立した実業人になれ。」といわれ、「わが人生は闘争なり」と記帳し、実業界に入った。

三井呉服店の入社試験に落第し、その後、

福沢桃介の紹介で日本銀行に入行した。1年弱続いた頃、桃介が来て「日銀なんかやめてしまえ。銀行なんぞ君の柄じゃない。僕と一緒に仕事をやろう」ということで日銀を辞め、丸三商会に入った。

丸三商会はアメリカ貿易商社の下請けで、桃介は松永に神戸支店長の辞令を渡し事務所を開設しよう命じた。その頃、シベリア鉄道に枕木を納めるという大口の契約が入ったが、桃介に対し「信用皆無、資産僅少」というよくない情報がアメリカの元受け商社筋に流れ、前渡し金の支払いを断ってきたので金融が梗塞し破産した。松永は、丸三商会に入社してわずか4ヶ月で閉鎖の憂き目にあった。

松永は、桃介からの再起資金500円を元手に神戸で、福沢の福と松永の松をとった「ゼネラルブローカー福松商会」の看板を掲げた。しかし、なかなか儲かる仕事はなく、当時、花形商品であった石炭販売事業を手掛け、大手の石炭業者を相手に談合破り、北海道炭を四日市に売込んで警察沙汰になるなどの大技で販路を広げて行った。

エピソード② 結婚式当日に石炭契約

1904(明治37)年、松永が30歳になった時、取引先の二十三銀行門司支店長福田が目をつけ「松永という男は見所のある男だ。将来は必ず大物になる奴だが、金のあるに任せて遊んでいるようだ。あれじゃ今に体をこわしてせっかくの事業もダメになる。一つよい嫁でも世話してやろう」と、中津の旧家で中津三美人の一人といわれた竹岡一子と見合い、結婚を承知した。

そして結婚式の当日、後に第百銀行の頭取、横浜正金銀行の重役になった原六郎の経営していた大任炭鉱の石炭を一手に引き受ける契約書を締結し、急いで帰ろうとすると「今夜は泊って、ゆっくり飯でも食って行きたまえ」と言われ、「今から私の結婚式で帰ります」と言うと「自分の婚礼の日にと引する奴がおるか」と叱られたが、そのまま最終列車に乗って下関の式場に間に合った。

松永は、1901(明治34)年に開業した官営八幡製鉄所の当初予算409万円を上回る600万円儲けることを目標にして、強気な事業を

進めて行った。しかし不良な筑紫炭鉱の買い入れ、石炭の下落、持ち株の下落が重なり破産した。さらに、大阪角田町にあった自宅が全焼し、全くの裸になった。この火事で焼いた福沢諭吉先生の記念の書などは取り返しがつかないと悔やんだ。

そして先生の説話が思い出され、「これまでは、金儲けに夢中であったが、今後の自分の行動は、できるだけ国家社会に奉仕することが必要であると思うようになった」と、逆境に合っても挫けずに自分の生き方を見つめ直した。その後、この福松商会は、松永の経営から離れたが、戦後まで続いた。

4 博多商業会議所会頭の就任から新政会の代議士を1期

1917(大正6)年、松永は41才の若さで博多商業会議所の会頭になり、同年、推されて福岡市から衆議院議員に立候補した。選挙は言論界の雄・中野正剛と有識者の宮川一貫を破り当選し、新政会に所属した。

北九州の電気、交通事業を攻略

電気、交通などサービスを提供する事業は、独占を伴い、先行投資を必要とする事業であることから“合理的な体制で、最も経済的に運営”することが課題であると考えていた。この考え方に基き東邦電力に至るまでの事業は次のとおりである。

1 福博電気軌道株式会社の設立

福岡市内の電気軌道の計画は、福岡馬車鉄道が1902(明治35)年に設立出願したが資金的にめどが立たなかった。また、明治43年に「九州沖繩八県連合共進会」が開催されることが決まった。そして、新会社の構想が求められ、1909(明治42)年に福博電気軌道(資本金：60万円)が設立され、取締役社長に福沢桃介、専務取締役に松永が就任した。

松永は、本拠を博多に移し、総指揮をとって敷設工事を始め、短期間で博多駅～呉服橋、黒門橋～大学前～今川橋間を開業させた。開業当初、自家用の火力発電所(出力：

政界では、シベリア出兵に反対、炭鉱事故の続発に関連し「炭鉱資本家は事故の義務を怠り、労働者の犠牲において稼いでいる」と保安対策の充実を要求、岡山県下の瀬戸内海にある小島が精錬工場のため木が枯れて赤肌になっているのを取り上げ、環境対策の必要性を政府に進言するなど生来の反骨精神を發揮した。

海外では、中国の満州で張作霖、上海で孫文などに会見し懇談した。また、政府代表団の一員として1918(大正8)年にパリで開かれた第一次世界大戦の講和会議、その前後にベルギーのブリュッセルでの万国議員委員会会議に出席した。この時に、後に首相となった近衛文麿公爵などと同席した。

このように、松永は反骨的で時代を先取りした長期的展望に立って発言したが、大正9年の総選挙で中野正剛の巻き返しに敗れ、落選したのを機に政界から足を洗った。

それから2年間、風邪をこじらせ唐津の虹ノ松原に近い海浜荘で、書を読み字の稽古などで静養し英気を養った。

240kW)を建設し電力を供給していたが、輸送量が多くなって供給力不足となり、1911年に博多電灯会社から受電するようになった。博多電灯は、1896(明治29)年に資本金5万円で設立され、翌年から事業を開始した。博多電灯は産炭地に近いということもあって石炭価格によって経営収支が大きく左右された。そこで、水力電源の必要から広滝水力電気と合併仮契約を締結した。しかし、石炭業の火力派の勢力の反対に会い不調に終わった。そこで、新鋭火力発電所を建設し拡張していくことになった。

2 九州電気株式会社を設立し広滝水力電気株式会社を吸収合併

広滝水力電気は、1906(明治39)年に資本金30万円で設立され、福沢桃介が取締役に松永が監査役に就任した。広滝水力は福岡、佐賀両県の福岡・久留米・佐賀の3市に供給する目的で広滝発電所(出力1,000kW)



広滝発電所(明治42年ごろ)

を完工した。当初の供給範囲は、佐賀県だけであったが、その後、久留米市など筑後方面へ拡大していった。さらに、川上川発電所(出力：700kW)の買収や唐津電灯株式会社の合併など大規模な投資資金が必要となった。そこで福沢と松永は、1910(明治43)年、九州電気株式会社を資本金200万円で設立し、広滝水力電気を吸収合併した。松永は取締役から常務取締役に就任し実際の経営にあたった。

3 博多電灯軌道株式会社から九州電灯鉄道株式会社の設立

博多電灯と福博電気軌道との関係は、電力供給契約の締結を契機として緊密となった。

1911(明治44)年に博多電灯軌道株式会社が資本金280万円で発足し、松永は専務取締役に就任した。

この合併後、九州電気の佐賀県在住の役員や株主も、博多電灯軌道の合併に前向きとなり、一方、博多電灯軌道側も供給力の増強が必要となり、1912(明治45)年に両社が合併し、九州電灯鉄道株式会社が資本金485万円で設立され、伊丹弥太郎が社長に、松永が常務取締役に就任した。

松永安左工門自伝には、「実際は、福博電気、博多電灯、広滝水力の3社合併を最初から計画したのだが、広滝は水力で佐賀の会社、博多電灯は火力で福岡の会社ということから、水力と火力の優劣、地方色ががらんで、3社の首脳陣は納得していたものの、内外に意見の対立が起こった」。そして「九州電気鉄道の誕生は、北九州にとっても、私どもにとっても画期的なことであった。地域は福岡、佐賀、長崎の3県に広がった…さらに福岡、佐世保、熊本、鹿児島、長崎などでガス事業を行い、後の西部合同ガスにまとめ得たのも、九州電灯鉄道の力があつたればこそである。」と述懐している。

関西電気株式会社、名古屋電灯株式会社から東邦電力の設立

東邦電力設立に至るまでの関西電気と名古屋電灯の歩みは次のとおりである。

1 関西電気の沿革

(1) 奈良電灯株式会社

奈良電灯は、1894(明治27)年に設立され、同年開業した。資本金は5万円、発電設備は火力40kW、当時の供給区域は奈良町、佐保村にすぎなかった。

(2) 関西水力電気から関西電気

関西水力電気は、1905(明治38)年に資本金15万円で設立した。その事業は300kWの水力発電所を建設し、奈良市およびその周辺に電灯を供給することにあり、設立と同時に奈良電灯の事業を譲り受けた。明治40年に白砂川発電所(出力：200kW)、布目川発電所(出力：300kW)を完工させた。

その後、1911(明治44)年に初瀬水力電気株式会社を買収、1914(大正3)年に橋本電気株式会社を買収したが、この供給区域を大正5年に高野鉄道株式会社に譲渡した。また大正8年には古刹室生寺近くの供給区域を持つ大和電鑛を買収していった。当時の資本金は450万円であったが、経費の高騰から収支が悪化し1921(大正10)年に名古屋電灯と合併した。合併と同時に関西電気と商号を変更した。

2 名古屋電灯の沿革

(1) 名古屋電灯株式会社

名古屋電灯は1887(明治20)年に資本金75,000円で設立され、1889(明治22)年に開業した。当初の発電所は電灯中央局と呼ばれ、出力100kW(エジソン式直流発電機

25kW・4台)で、電柱391本を敷設し約400戸の需要家に供給した。

(2) 愛知電灯株式会社を合併

愛知電灯が1894(明治27)年に資本金75,000円で設立され、下広井発電所(出力:60kW)を建設し名古屋の繁華街大須方面に供給した。また、明治29年に直流式50kWと交流式60kWの発電機を増設したが、この交流発電機は中部地方で最初の交流発電であった。

名古屋市内に二つの電灯会社が並立することは共倒れになることが懸念され、京都電灯大沢喜助社長の斡旋で名古屋電灯と合併した。

(3) 東海電気株式会社を合併

東海電気は、明治34年に岡崎電灯の経営者を中心となって設立された会社で、当初、三河電気といった。矢作川水系に小原水力発電所(出力:100kW)を建設し、明治37年から名古屋市内に電力供給を始めた。東海電気は割安な料金で供給したため、名古屋電灯も値下げをして対抗した。こうした競争は両社の経営を圧迫し名古屋電灯に合併された。

(4) 名古屋電力株式会社を合併

名古屋電力は明治39年、木曾川本流の八百津に木曾川発電所(出力:10,000KW・後に八百津発電所と改名)を建設し、名古屋市への電灯電力を供給する目的で、資本金500万円で設立された。

しかし発電所着工後、深刻な経済不況に直面し、巨額の資金調達ができなくなり、当時、名古屋電灯の福沢桃介常務が両社の合併をまとめ上げ、1910(明治43)年、名古屋電力を吸収合併した。

(5) 福沢桃介社長の経営刷新

1914(大正3)年から1921(大正10)年まで、名古屋電灯の社長として経営にあたった福沢桃介は、士族の商法として批判の多かったサービスの向上に取り組んだ。また、豊富で安価な木曾川の

水力電気を供給して名古屋の工業化を図るため、名古屋電灯から製鉄・製鋼部門を独立させ、1916(大正5)年に株式会社電気製鋼所(現在の大同特殊鋼に発展)、1918(大正7)年に木曾電気製鉄株式会社を設立した。なお、熱田火力発電所構内に造った1.5トンのアーケ炉は、現在、大同特殊鋼株知多工場に展示保管されている。

(6) 関西水力電気と合併

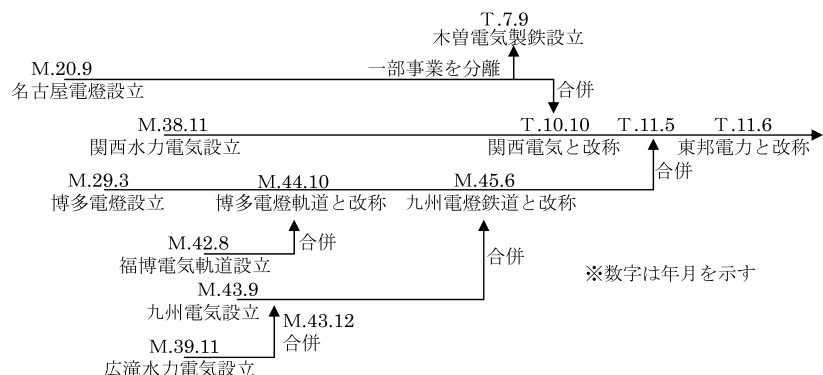
名古屋電灯は、名古屋市との政争や報償契約改定の失敗があり、また電灯電力の需要が急増し補給火力の弱い冬になると停電が頻発した。さらに水力発電所建設による資金的逼迫が重なり、大正10年関西水力電気と合併した。

3 東邦電力の設立

東邦電力株式会社の成立過程は、資料1「東邦電力統合沿革図」のとおり、①1921(大正10)年、奈良を供給区域としていた関西水力電気株式会社が、名古屋を中心とし、東海地方を主な供給区域としていた名古屋電灯株式会社を吸収合併して、関西電気株式会社と商号を変更し、本社を旧名古屋電灯本社に移転 ②翌年、福岡を中心とし、北九州地方を主な供給区域としていた九州電灯鉄道を合併 ③新会社名を公募し、東邦電力株式会社と商号を変更し、本社を東京に移転した。このように東邦電力の前身会社は関西水力電気であるが、電気事業の実態からみると名古屋電灯の方が歴史も古く、規模もはるかに大きかったので、東邦電力の発祥は、名古屋電灯の設立にさかのぼることとなった。

東邦とは「東の邦」すなわち日本を指し、

資料1 「東邦電力統合沿革図」



「光は東邦より」という意味もこめられている。資本金は1億3982万円、供給区域は九州、近畿、東海の一府10県に亘り、社長に伊丹弥太郎、副社長に松永安左工門が就任した。そして、九州から、中京、東京へと電気事業を拡大していった。

松永安左工門の略歴(1875~1971)

1875	明治 8	1	長崎県杵岐郡石田村に松永家の長男として誕生。幼名・亀之助
1882	明治15	8	石田小学校入学
1889	明治22	15	慶応義塾に入学
1893	明治26	19	父死去。帰郷して家業を継ぐ(呉服、酒造、海産)
1895	明治28	21	慶応に復学
1896	明治29	22	三田に奇宿舎に入舎、この頃より福沢桃介と経済論で議論。
1898	明治31	24	福沢諭吉の記念帳に「我が人生は闘争なり」と書く 福沢諭吉のすすめにより三井呉服店の就職試験を受ける
1899	明治32	25	福沢桃介のすすめにより日本銀行に就職
1900	明治33	26	日本銀行を退職し、福沢桃介と共に丸三商店神戸支店長に就任 丸三商店破産し閉店
1901	明治34	27	ゼネラルブローカー福松商会を設立、石炭販売事業で成功
1907	明治40	31	持ち株の大暴落により破産、自宅が火事で全焼
1908	明治41	32	広滝水力電気の監査役に就任 杵岐生まれから「一州」と号す
1909	明治42	33	福博電気軌道株式会社を設立(社長：福沢桃介、専務：松永安左工門)
1912	大正 1	36	九州電灯鉄道の取締役役に就任
1914	大正 3	38	西部合同ガスを設立、社長に就任(九州のガス会社10社を合併)
1917	大正 6	41	博多商工会議所会頭に就任 福岡市選出衆議院議員に当選
1921	大正10	45	関西電気副社長に就任
1922	大正11	46	関西電気は九州電灯鉄道を合併 関西電気は商号を東邦電力と変更、本社を東京に移転
1924	大正13	48	社団法人日本電気協会会長に選任
1928	昭和 3	52	東邦電力株社長に就任
1934	昭和 9	58	「六十にして耳に従う、七十にして矩のりを越えず」から耳庵と号す
1936	昭和11	60	中部共同火力株を設立、社長に就任
1937	昭和12	61	長崎商工会議所主催の座談会の席上「官吏は人間の屑だ」と発言
1938	昭和13	62	伊豆堂ヶ島の岩山を購入(翌年、一日庵を建てる)
1939	昭和14	63	電力界から手を引き、茶道三昧の生活に入る 武蔵野柳瀬山荘内に照月軒と自在軒を建てる
1940	昭和15	64	東邦電力取締役会長に就任
1942	昭和17	66	東邦電力の電気事業設備を日本発送電、各配電会社に出資し解散
1946	昭和21	70	柳瀬山荘を国立博物館に寄贈、小田原の新居に住む
1949	昭和24	74	電気事業再編成審議会委員に就任、第1回会合で委員長に就任
1950	昭和25	75	公益事業委員会が発足し、委員長代理に就任
1951	昭和26	76	電気事業再編成(9電力会社)の強行で“電力の鬼”と俗称される
1953	昭和28	78	財団法人電力中央研究所理事長に就任 アジア経済調査会を設立、議長に就任
1954	昭和29	79	天皇陛下堂ヶ島の一日庵にお立寄り
1956	昭和31	81	「産業計画会議」を組織し委員長に就任
1963	昭和38	88	松永記念振興財団名誉会長に就任
1964	昭和39	89	勲一等瑞宝章授与・授賞式には欠席
1965	昭和40	89	産業計画会議第14次勧告「原子力政策の確立を希望する」発表
1968	昭和43	93	慶応義塾創立100周年記念式典で名誉博士号を授与
1971	昭和46	96	死去、本人の遺志により叙勲を辞退、葬儀・法名無

なお、松永安左工門自伝などを参考に略歴を作成したので、年令は数え年である。

(寺澤 安正)